

「惜別の歌」

今日は、明桜館で新規採用の今屋博貴先生の指導教諭である岩屋秀男先生最後の勤務日でした。

岩屋先生とは、私が二十代の頃、鹿児島市内のC高校で一緒に勤務させていただきました。当時から人間味溢れる先生で、ユーモアとバイタリティーを持ち合わせ、生徒たちから大変慕われていましたが、今年度、縁あって本校へおいでいただき、再び一緒に仕事をする機会に恵まれました。

指導授業の最後は今屋先生が副担任をしている105ルームでの授業でしたが、今屋先生の配慮で5分前に終わり、残りの時間は岩屋先生最後の挨拶の時間となりました。

先生には、今屋先生の授業ぶりとそれに応える生徒たちの素晴らしさを褒めていただきました。

そして「明桜館の生徒たちは桜の花のように明るくて素晴らしい。あなたたちは素直で反応がよく、この一年近く授業が充実していて楽しかった。」とも言っていました。生徒たちからも寂しいとの声が聞こえてきました。そして、終わりに島崎藤村の「惜別の歌」を朗々と歌われました。

『遠き別れに たえかねて この高殿に 登るかな
悲しむなかれ 我が友よ 旅の衣を ととのえよ
別れといえば 昔より この人の世の 常なるを
流るる水を 眺むれば 夢はずかしき 涙かな』

先生の生徒たちへの思い溢れることばや本当に別れの寂しさが伝わる歌を聞きながら、愛情溢れる先生の気持ちが生徒たちにも十分伝わっているのがわかりました。「後期高齢者の老教師と付き合ってくれてありがとう」と言われ教室を出て行かれましたが、私から先生へ今屋先生のご指導と生徒たちの指導に感謝を申し上げたいと思います。

ICT教育等が声高に叫ばれますが、学校は、教師と生徒の心と心が呼応し、生徒を慈しむ心こそが原点であり、そこから教師と生徒の心の共有が生まれることを再び学びました。「一年間ありがとうございました。」

